# 新日本文法研究

久野　暲　著

# 新日本文法研究

久野　暲　著

大修館書店

久　野　　暲（くのすすむ）

1933年東京生れ。東京大学文学部言語学科で言語学を専攻。1956年に学士号，1958年に修士号を受ける。1960年，フルブライト研究員として渡米，ハーバード大学で数理言語学を研究。1963年同大学言語学科博士課程に入り，1964年博士号を受ける。現在，同大学言語学科教授。著書に *The Structure of the Japanese Language* (The MIT Press, Cambridge, Mass, 1973)，『日本文法研究』(大修館書店，1973)，『談話の文法』(大修館書店，1978) がある。

新日本文法研究
© S. Kuno 1983

1983年 4 月 1 日　初版発行　　定価2,200円

検印
省略

著者　久野　暲
発行者　鈴木敏夫

発行所　株式会社　大修館書店
[101] 東京都千代田区神田錦町 3-24
電話 (03) 294-2221(大代表) 振替 東京 9-40504

印刷／壮光舎　製本／牧製本
*3081-220410-4305　Printed in Japan

# はしがき

拙著『談話の文法』(大修館，1978年) 出版以後の，日本文法の諸問題に関する私の研究結果をまとめて，ここに出版する。中には，数年前に発表した論文の焼き直しの積りで書き始めた章もあるが，書いているうちに当時の研究の不備な点に気が附き，又，当時気がつかなかった新しい事実に気が附いたりして，元の論文の数倍の量にふくれ上ってしまったものもある。実は，本書の第10章迄は，1981年の２月に既に一応書き終っていた。その後，他の研究に時間を奪われ，最終稿を完成する暇がなく，１年間放っておくこととなってしまった。しかし，その間に，私の他の言語学の研究も進み，それにつれて，私の日本文法に関する理解も進歩したように思う。

本年夏の終り，東京で開かれた国際言語学者会議での発表を終えてアメリカに戻り，意を決して，原稿を取り出し，最後の仕上げに取りかかった。この際，大修正を加えた章が多い。特に，第Ｉ部の複合動詞の敬語形，中でも，謙譲形に関する分析については，新しいアイディアが浮かび，それ迄説明できなかった問題が，説明できるようになった。又，本書最後の２章は，新しく書き加えた。この２章は，一年半前には，今のような形では，まとめることができなかったに違いないものである。一年半原稿を寝かせておいて幸いであった，という気分である。

本書の執筆に関しては，色々な方々の御世話になった。ハーバード大学と MIT の日本語言語学研究の客員研究員，大学院生，ハーバード大学の日本文法研究会のメンバー，又，私の講演・研究発表の際，有益な質問をして下さった方達等，皆様に感謝しなければならない。名前を列挙すべき処であるが，不注意，失念のため名前洩れをして，却って失礼をしてしまうといけないから，全て省くこととする。しかし，本書の原稿を始めから終り迄読んで，例文の適格度判断，分析の妥当性，説明の明瞭度などにつ

いて有益なコメントを下さった増永喜代子さんの名前は，記しておかなければならない。

本書の第７章「『知ラナイ』と『知ッテイナイ』」は，増永喜代子さんとの共著，第10章「『ダケ・ノミ・バカリ・クライ』と格助詞の語順」は，多津子・モネーンさんとの共著である。この両章を本書に収録することに快く同意して下さったお二人に感謝したい。

大修館編集部の藤田佐一郎氏からは，いつものことながら，タイミングのよい原稿催促を何度もいただいた。実は，今回意を決して原稿を完成することにしたのも，国際言語学者会議の際，同氏と会って，何となくどうしても完成しなければならない，という気になったからであった。又，原稿から出版迄の全過程で，同編集部の康駿氏に，一方ならぬ御世話になった。両氏の御尽力に感謝したい。

最後に，妻の揚子の内助の功に感謝しないと，どうもこの序文のまとまりがつかない。

1982年10月22日
マサチューセッツ州ベルモントで

久野　暲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 目　次

はしがき……iii

**第Ⅰ部　敬語の文法**

第1章「書キ始メル」の敬語形……5
1. はしがき……5
2.「書キ始メル」の敬語形……5
3. 疑似反例の説明……13
4. 謙譲形……24
5. おわりに……30
第2章「書イテイル」の敬語形……37
第3章「書イテシマウ」の敬語形……45
第4章　敬語形形成の巡回性……54
第5章　尊敬形と二重主格構文……70

**第Ⅱ部　否定と疑問**

第6章「書カナイデ」と「書カナクテ」……95
第7章「知ラナイ」と「知ッテイナイ」……109
第8章　否定辞と疑問助詞のスコープ……117

**第Ⅲ部　日本文法の諸問題**

第9章「レル・ラレル」と「デキル」……149
第10章「ダケ，ノミ，バカリ，クライ」と格助詞の語順……157
1.「ダケ」と格助詞……157
2.「ノミ」と格助詞……167
3.「バカリ」……168

4. 「クライ」……169
5. おわりに……171
第11章　ゼロ代名詞，主題，予測性 ……174
第12章　中立受身文と被害受身文 ……192
1. 序……192
2. 受身にならない目的語（英語）……200
3. 日本語の被害受身文……205
4. 被害受身文の再考察……209
5. 受身文と再帰代名詞……213
6. 結　　論……216

参照文献 ……221
索　　引 ……224

# 第I部　敬語の文法

## 第1章　「書キ始メル」の敬語形

### 1.　はじがき[1]

現代日本語の敬語法は，日本文法の中でも特に集中的に研究されて来た分野の一つであろう。敬語法に関する数限りない論文が発表され，また概説書，入門書，随想本が巷に氾濫している。動詞の敬語形の規則など，もう研究しつくされていてもおかしくない筈であるが，複合動詞の敬語形については，ほとんど何も研究結果が発表されていないと言ってよいであろう。[2]　その原因の一つは複合動詞の敬語形の用法に，変換文法理論的視野を持って考察しないと解明しにくい部分があることにあると考えられる。本章と，それに続く二章で，「書キ始メル」のような $V_1$-i $V_2$ 型の複合動詞，「書イテイル」のような「Vテイル」型（この型を広い意味で「複合動詞」と呼ぶことにする），及び「書イテシマウ」のような「Vテシマウ」型の敬語形を考察しながら，変換文法理論の「目の附け所」を示して見たいと思う。

### 2.　「書キ始メル」の敬語形

「書キ始メル，書キ続ケル」のような $V_1$-i $V_2$ 型の複合動詞には，一般的に言って，少くとも次の二つの型の尊敬形がある。[3]

（1）　a.　$V_1$-i $V_2$ 全体に「オ…ニナル」が附加されるパターン：
「**オ**書キ始メ**ニナル**，**オ**書キ続ケ**ニナル**」

b.　$V_1$ だけに「オ…ニナル」が附加されるパターン：
「**オ**書キ**ニナリ**始メル，**オ**書キ**ニナリ**続ケル」

一見，上の二パターンの間には，識別できるような意味の差がないように思われる。また，私の知る限り，両者の用法上の違いが問題にされたことはない。本章の目的は，この二パターンの間に，意味上，構文法上の重要な違いがあることを指摘することにある。

（1 a）のパターンでは，尊敬を表わすモルフェーム「オ…ニナル」が，「始メル，続ケル」を含めた複合動詞全体についている。ここで，「始メル，続ケル」の意味上の主語は，$V_1$ の意味上の主語，すなわち文全体の主語であると仮定しよう。例えば，

（2）　田中先生ガ，手紙ヲオ書キ始メニナッタ。

の「書ク」，「始メル」の意味上の主語は，共に「田中先生」であり，この主語に対する尊敬を表わすため，「書キ始メル」全体に，「オ…ニナル」が附加されたものと仮定する訳である。

他方，（1 b）のパターンでは，尊敬を表わすモルフェーム「オ…ニナル」が，「始メル，続ケル」にはついていない。例えば，

（3）　田中先生ガ，手紙ヲオ書キニナリ始メタ。

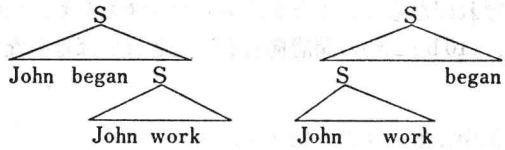
において，「書ク」に「オ…ニナル」が附加されているのは，その意味上の主語「田中先生」に対する尊敬を表わすためである。他方，「始メル」に尊敬を表わすモルフェームが附いていないことは，「始メル」の意味上の主語が「田中先生」ではないことを指し示しているものと想定できる。

ここまで推論を進めると，すぐ Perlmutter (1970) の，英語の動詞 begin の分析が頭に浮ぶかことと思う。Perlmutter は，

（4）　John began to work.

のような文に，（5 a），（5 b）で表わされる二つの深層構造があると仮定した。

(5)　a.　　b.




(5 a) の begin は，「…ことを始める」という意味の他動詞として，行動主のコントロールできる「動作」を表わし，John を主語，John work という文を目的語としている。他方，(5 b)の begin は，「…ということが始まる」という意味で，行動主のコントロールの外にある「出来事」を表わし，John work という文を主語としている。

(4)のような例文は，(5 a)，(5 b)の二つの深層構造から派生されるから多義であるが，begin を含んだ文がすべて多義である訳ではない。例えば，命令形は，行動主のコントロールできる動作についてしか作れないから，

(6)　Begin to work.
　　「働き始めなさい」

は，他動詞の begin ((5 a)の構造参照) でしかあり得ない。他方，

(7)　The guests began to arrive.
　　「客が着き始めた」

の begin は，自動詞の begin でしかあり得ない。なぜなら，(7)は，客が三々五々と到着し，まだ到着していない客も大勢いることを表わす記述文であって，客が申し合わせて，自分達のコントロール下でとり得る様な動作を表わし得ないからである。因みに，

(8)　*Begin to arrive.
　　「*着き始めなさい」

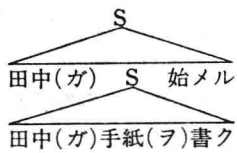
は，同じ理由で非文法的である。

Perlmutter は，他動詞と自動詞二つの begin を深層構造に想定しなければならない構文法的根拠をいくつか挙げているが，それをここに紹介することは，本章の主目的から外れるので，省くこととする。柴谷 (Shibata-

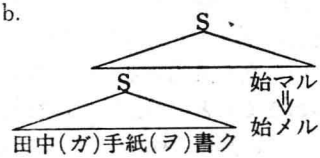
ni, 1973)は，日本語の「始メル，続ケル」等にも，同じ他動詞，自動詞二分析を与えなければならないことを主張した。すなわち，(9)のような文には，(10a)，(10b)二つの深層構造が設定されねばならないという仮説である。

(9)　田中ガ手紙ヲ書キ始メル。

(10)　a.




b.




(10a)において「田中」は，埋め込み文の動詞「書ク」の主語であると同時に，主文の動詞「始メル」の主語でもある。他方，(10b)においては，「田中」は，「書ク」の主語ではあるが，「始メル」の主語ではない。「始メル」は，この深層構造では自動詞であって，名詞節「田中(ガ)手紙(ヲ)書ク」を主語としているからである。柴谷は，日本語の「始メル」にもこのように二つの深層構造を与えることが必要であることの構文法的根拠をいくつか挙げているが，それをここで列挙することは，本筋から外れるので，省略する。重要なことは，動詞の連用形に附加する「始メル，続ケル」に「…ことを始める，続ける」の意味の他動詞的用法と，「…ことが始まる，続く」の意味の自動詞的用法があること，そして，第二の用法では，表層文の主語が，「始メル，続ケル」の意味上の主語ではないということである。

さて，上の観察から自動的に導き出せるのは，次の仮説である。

(11)　$V_1$-i $V_2$ 型の複合動詞の尊敬形は，$V_2$ が他動詞なら $V_1$-i $V_2$ 全体に，$V_2$ が自動詞なら $V_1$ だけに尊敬モルフェームを附加して作る。

上の仮説の機能的説明はもちろん，次の二点に要約できる。(i) $V_2$ が他動詞なら，表層文の主語は，意味上，$V_1$，$V_2$ 両方の主語である((10a)の構造参照)。したがって尊敬モルフェールは，その両者の複合体 $V_1$-i $V_2$ に附加される。(ii) $V_2$ が自動詞なら，表層文の主語は，$V_2$ の意味上の主

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

語ではない。従って，$V_2$ は尊敬モルフェームとは無関係で，$V_1$ にだけ，尊敬モルフェームが附加される。

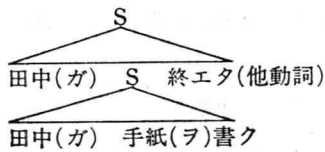
上の仮説が正しいかどうかは，他動詞としてしか解釈し得ない「始メル，続ケル」等，自動詞としてしか解釈できない「始メル，続ケル」等が，その尊敬形として，（1a），（1b）何れのパターンを取り得るかを調べればよい。もちろん，もし(11)の仮説が正しければ，前者は，「オ…始メニナル」のパターンのみ許し，後者は，「オ…ニナリ始メル」のパターンのみ許すはずである。

まず第一に，「終エル」を調べて見る。この動詞は，柴谷が示したように，深層構造において，名詞節を主語とする自動詞としての機能を持っていない。例えば，

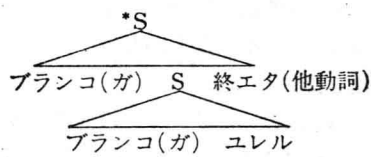
(12)　a.　田中ガ，手紙ヲ書キ終エタ。
　　b.　*ブランコガ，ユレ終エタ。

(b)文の非文法性は，「終エタ」が「終った」の意味を伴なって，「ブランコ(ガ)ユレル」を主語とするような深層構造の中に現われ得ないことを示している。次の四構造を参照されたい。

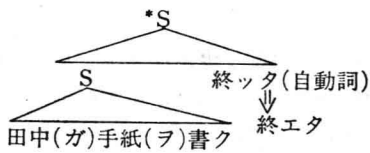
(13)　a.



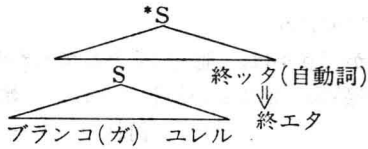

b.




(14)　a.



b.




深層構造(13 a)から，文法的な文(12 a)が派生する。他動詞の「終エル」は，深層構造において，その動作をコントロールできる行動主を主語とすることを要求するから，(13 b)は，意味的に，不適格な深層構造である。なぜなら，「ブランコ」は，このような行動主としての資格がないからである。他方，もし(14 b)の深層構造が存在するとすれば，表層文(12 b)が文法的であるはずである。しかし実際は，(12 b)は非文法的であるから，「終エル」は，深層構造において，「終わる」の意味での自動詞的機能を持っていない，という結論になる。従って，(12 a)は，(14 a)のような深層構造からは派生できない，ということになる。

上の推論に基づき，(11)の複合動詞尊敬形形成の規則を適用すると，「書キ終エル」には，この複合形全体に「オ…ニナル」が附く形式のみ存在し，「書キ」のみに「オ…ニナル」が附く形式（(14 a)をソースとする）は存在しないという予言ができる。この予言が正しいことは，次の例から明らかである。

(15)　a.　田中先生ガ，手紙ヲ<u>オ</u>書キ終エ<u>ニナッタ</u>。
　　b.　*田中先生ガ，手紙ヲ<u>オ</u>書キ<u>ニナリ</u>終エタ。

(15 b)の非文法性は，$V_2$ が他動詞的機能を果たしている場合の $V_1$-i $V_2$ の尊敬形に，「オ $V_1$-i $V_2$ ニナル」形しかなく，「オ $V_1$-i ニナリ $V_2$」形はないことの有力な証拠を提供してくれる。

他動詞用法しかない $V_2$ には，「終エル」の他に「ヤメル，棄テル，破ル」などがある。次の(c)文の非文法性はすべて，(11)の予測する通りである。

(16)　a.　山田ハ，手紙ヲ書キヤメテ，タバコニ火ヲツケタ。
　　b.　山田先生ハ，手紙ヲ<u>オ</u>書キヤメ<u>ニナッテ</u>，タバコニ火ヲオツケニナッタ。

c. *山田先生ハ，手紙ヲオ書キニナリヤメテ，タバコニ火ヲオツケニナッタ。

(17) a. 山田ハ，ソノ手紙ヲ書キ棄テタ。
b. 山田先生ハ，ソノ手紙ヲオ書キ棄テニナッタ。
c. *山田先生ハ，ソノ手紙ヲオ書キニナリ棄テタ。

(18) a. 山田ハ，ソノ手紙ヲ書キ破ッタ。
b. 山田先生ハ，ソノ手紙ヲオ書キ破リニナッタ。
c. *山田先生ハ，ソノ手紙ヲオ書キニナリ破ッタ。

同様次の例を参照されたい。

(19) a. 山田ハ，ソノ本ヲ読ミタガッタ。
b. 山田先生ハ，ソノ本ヲオ読ミタガリニナッタ。
c. ?? 山田先生ハ，ソノ本ヲオ読ミニナリタガッタ。

(20) a. 山田ハ，ソノ手紙ヲ出シ忘レタ。
b. 山田先生ハ，ソノ手紙ヲオ出シ忘レニナッタ。
c. *山田先生ハ，ソノ手紙ヲオ出シニナリ忘レタ。

(21) a. 山田ハ，田中ト，ソノ原稿ヲ読ミ合ワセタ。
b. 山田先生ハ，田中ト，ソノ原稿ヲオ読ミ合ワセニナッタ。
c. *山田先生ハ，田中ト，ソノ原稿ヲオ読ミニナリ合ワセタ。

上例の「タガル」，「忘レル」，「合ワセル」は，意味から言っても，構文法的特徴（例えば，「人ノ手紙ヲ読ミタガルナ」，「コノ手紙ヲ出シ忘レルナ」，「二人デ原稿ヲ読ミ合ワセロ」のように，禁止，命令形が可能）から言っても，埋め込み文を目的語とする他動詞であると考えられる。(c)文の非文法性は，(11)の仮説の予言する通りである。

次に，$V_2$が自動詞的機能しか果せない$V_1$-i $V_2$の尊敬形を調べて見よう。既に英語の例で明らかにしたように，「着キ始メル」の「始メル」は，意志でコントロールできない出来事を表わし，自動詞的機能しか持っていない。したがって，その尊敬形は，「着キ」の部分に尊敬モルフェーム「オ…ニナル」を附加することによってしか形成できないはずである。この予言の正しいことは，次の例の示す通りである。

(22) a. 大変ダ。団体ノ客ガモウ着キ始メタゾ。

b. ??大変デス。団体ノオ客様ガモウオ着キ始メニナリマシタヨ。

c.　大変デス。団体ノオ客様ガモウオ着キニナリ始メマシタヨ。

話し手の中には，(22 b)に何ら不自然さがないという人があるかも知れない。そういう話し手達にとっては，「着キ始メル」は，意志でコントロールできる動作を表わす用法を持っているのであろう。[4]

さらに次の例を参照されたい。

(23)　a.　田中ハ，山田夫人ガ好キニナリ始メタラシイ。

b. *田中先生ハ，山田夫人ガ好キニオナリ始メニナッタラシイ。

c.　田中先生ハ，山田夫人ガ好キニオナリニナリ始メタラシイ。

(24)　a.　君モ，ソロソロ交際費ガ要リ始メルダロウ。

b. *山田サンモ，ソロソロ交際費ガオ要リ始メニナルデショウ。

c.　山田サンモ，ソロソロ交際費ガオ要リニナリ始メルデショウ。

(25)　a.　スミス君モ，ヤット，日本語ガ解リ始メタラシイ。

b. *スミス先生モ，ヤット，日本語ガオ解リ始メニナッタラシイ。

c.　スミス先生モ，ヤット，日本語ガオ解リニナリ始メタラシイ。

(26)　a.　君ノ息子ハ，ニキビガデキ始メタネ。

b. *オ宅ノ坊チャンハ，ニキビガオデキ始メニナリマシタネ。

c.　オ宅ノ坊チャンハ，ニキビガオデキニナリ始メマシタネ。

上の文における(b)文の不適格性，(c)文の適格性の判断は，かなり明瞭であり，なおかつ安定しているものと考えられる。[5] これは，「好キニナリ始メル，要リ始メル，解リ始メル，デキ始メル」が意志でコントロールできない出来事を表わすことがはっきりとしているからであろう。もし(23 b，24 b，25 b，26 b）の判定の明瞭でない話し手があれば，その話

し手の文法に関する限り，(11)の規則は存在せず，(1 a)，(1 b)の二形式が自由交替形として共存しているということになるであろう。

(23)～(26)ほど明瞭でないかも知れないが，多くの話し手の間で，(b)文は不適格だという判定が行われている例文をさらに列挙する。

(27) a.　疫病で，王侯貴族ガ続々死ニ始メタ。
　　b. ??疫病デ，王侯貴族ガ続々オナクナリ始メニナッタ。
　　c.　疫病デ，王侯貴族ガ続々オナクナリニナリ始メタ。
(28) 山田ハ，10分モ歩カナイウチニ，ノドガカワキ始メタ。
　　b. *山田先生ハ，10分モオ歩キニナラナイウチニ，ノドガオカワキ始メニナッタ。
　　c.　山田先生ハ，10分モオ歩キニナラナイウチニ，ノドガオカワキニナリ始メタ。
(29) a.　山田ハ，又，胃ガ痛ミ始メタラシイ。
　　b. *山田先生ハ，又，胃ガオ痛ミ始メニナッタラシイ。
　　c.　山田先生ハ，又，胃ガオ痛ミニナリ始メタラシイ。

(23)～(29)の諸例で，$V_1$ が自動詞用法であることが明瞭な $V_1$-i $V_2$ 型の尊敬形は，$V_1$ だけに「オ…ニナル」を附加して形成し，$V_1$-i $V_2$ 全体にそれを附加して形成することができないことが明らかとなったことと思う。

## 3.　疑似反例の説明

ここで，(11)の仮説の反例と考えられるかも知れないような例文を挙げ，それらが問題の仮説と矛盾したものではないことを示す。第一に次の例文を参照されたい。

(30) a.　雨ガ降リ止ンダ。
　　b.　子供ガ泣キ止ンダ。
　　c. ?泣キ止メ。
(31) a.　オ子様ガオ泣キ止ミニナリマシタヨ。

b. *オ子様ガオ泣キニナリ止ミマシタヨ。

(30 a)の文法性は，「止ム」が深層構造で，埋め込み文を主語とする自動詞構造（(10 b)の句構造）に現われ得ることを示しているものと考えられる。他方，(30 c)の適格度の判断については個人差が多く，「止ム」が他動詞構造（(10 a)の句構造）に現われ得るかどうかについては，一律に判断できないようである。ここで重要なのは，(30 b)に少くとも，自動詞構造からの派生があるはずであるということである。もしそうなら，埋め込み文の動詞「泣ク」に尊敬モルフェームが附加された形式(31 b)が文法的であるはずである。ところが，この文は，完全に非文法的である。「泣キ止ム」全体に尊敬モルフェームが附加された(31 a)のみが文法的である。

上の事実は，一見，仮説(11)の反例であるかのように見えるが，実はそうではない。「止ム」が動詞の連用形について「複合動詞」を形成するのは，「降リ止ム，揺レ止ム，泣キ止ム」等，極く限られた場合であって，「V-i 止ム」形の大部分は，実在しない複合形式である。例えば，「落チ止ム，ズレ止ム，スベリ止ム，光リ止ム，怒リ止ム，ワメキ止ム，息ヲシ止ム，フルエ止ム」等は，全て使用できない複合形である。この事実は，(30 b)を，[[子供(ガ)泣ク] 止ンダ] という深層構造から派生すると考えることは間違いで，「泣キ止ム」を単純動詞として，辞書項目の一つと見做すことが必要であることを示している。従って，(30 b)の深層構造は，[子供（ガ）泣キ止ンダ] という単純構造であって，尊敬モルフェームは，「泣キ止ム」全体に附加されるということになる。

第二に，次の例を参照されたい。

(32)　a.　先生ガ風邪デ学校ヲ休ミ始メタ。
　　b. ??先生方ガ風邪デ学校ヲオ休ミ始メニナッタ。
　　c.　先生方ガ風邪デ学校ヲオ休ミニナリ始メタ。

(33)　a.　山田ハ，色々ロ実ヲ作ッテ，学校ヲ休ミ始メタ。
　　b.　山田先生ハ，色々ロ実ヲオ作リニナッテ，学校ヲオ休ミ始メニナッタ。
　　c.　山田先生ハ，色々ロ実ヲオ作リニナッテ，学校ヲオ休ミニナリ始メタ。

(32 b)の不適格性，(32 c)の適格性には問題がない。(32)は，先生達がさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com